

かねざわ

第42号

平成24(2012)年8月

100回記念講座が成功裡に終わり、
その記念パーティーでも交流の輪が
更に広がりました(P2~8)

目次

運営委員会からのお知らせ

- 2 100回記念講座報告
- 5 100回記念パーティー報告
- 9 探訪(第6回学習会)のお知らせ
- 10 原稿募集 会報およびホームページ

学習会

学習会の概要とアンケート結果

- 10 第1回「道標等で迎える金沢道」
- 12 第2回(100回記念講座)「称名寺と金沢氏」
- 13 第3回「三浦一族の興亡」

分科会からの便り

- 15 「懐かしの映画」鑑賞録 No.7 佐藤 晃
- 19 「浮雲俳句会」抄録 No.18 北野 清市

歴史研究

- 22 六浦あちらこちら(2) 熊谷 哲
- 24 『吾妻鏡』を読む(5) 小倉 英明

会員からの寄稿

- 25 「家康忌」参詣の記 渡邊 紀一

行事予定

- 28 9月~11月の予定



金沢区生涯学習“わ”の会

ホームページ: <http://kanazawa-wanokai.in.coocan.jp/>

メー ル: yokohama.kanazawa.wanokai@gmail.com

100 回記念講座報告

準備から結果まで

計画のスタート

100 回記念講座の準備は平成 23 年 5 月 21 日の運営委員会から始まった。1 週間前の 5 月 14 日に平成 23 年度総会・第 1 回学習会を開催した直後の運営委員会である。

小俣代表から「平成 11 年 5 月の第 1 回学習会から公開歴史講座を含めて数えると、1 年後の平成 24 年 6 月の学習会が 100 回目の講座になる。この 6 月の学習会を特別の講座にしたい。ついでに、運営委員会で検討を始めると同時に、次回 6 月の学習会で記念講座の講師とテーマ募集のアンケートを実施したい。」との提案があった。これを受けて、運営委員会でアンケートの準備と 100 回講座記念の事業計画作成作業がスタートした。

講師とテーマ探し

6 月 11 日の学習会でアンケートを配布。その結果は 7 月 9 日の学習会での回収待ちとなった。

アンケート回収までの間に開催された運営委員会では、全会員が参加する事業として、平成 20 年 11 月の“わ”の会創立 10 周年記念事業と同じ「講座・アトラクション・パーティー」の 3 部構成で、午後開催とする事業案が出され、講師としてはこれまでの学習会アンケートで好評な先生の名前があがった。

講師候補と折衝

小俣代表は従来から他のグループで開催される講座に出席するなど、注目講師・注目テーマの情報をこつこつと収集し、それを一覧表にまとめた貴重な資料を所持している。その中で、“わ”の会では講師をお願いした経験はないが、講座はいつも満席で、参加希望者に抽選漏れが多数出るほど好評な講師であることから、県立金沢文庫の永村文庫長に注目していた。

この予備情報と記念講座の講師探しの思いから、7 月初めに小俣代表が県立金沢文庫で永村文庫長に出会った時、唐突ながら記念講座の講師をお願いしたところ、詳細はともかく快く引受けて頂けることになった。

7 月 9 日の学習会では、6 名の会員からアンケートの回答を頂いた。うち 3 名が、講師は県立金沢文庫の先生方へお願いしたらとの回答で、2 名が永村文庫長ならびに西岡学芸課長をあげられ、もう 1 名は、永井主任学芸員であった。テーマとしてはお寺や仏像、鎌倉幕府に関するものであった。他の 3 名は、「横浜・金沢天災地震の歴史」、「横浜で活躍したお雇い外国人」、「能登時国家」であった。アンケートの回答にも名前があげられ、永村文庫長を講師に選ぶことは会員の希望にも一致することが確認できた。

記念講座詳細の折衝

8月には県立金沢文庫の西岡学芸課長を通して記念講座の具体的な開催日時、場所、テーマの折衝をはじめた。9月末には、テーマは未定であるが、日時は平成24年6月29日午前中、場所は県立金沢文庫と決まった。継続会員募集パンフレットに掲載の平成24年度学習会予定表の6月欄にこれを記載。10月14日の学習会で配布し、会員の皆様にお知らせした。

毎年、年度末にはその年のお礼と次年度のお願いのために文庫長を訪問している。その訪問を平成24年3月25日に行った。今回は、100回講座の一覧リスト、そこから“わ”の会創設から現在に至るまでに文庫にお世話になった講座を抜き出したリストの2つを持参し、平成13年からは、毎年の学習会の1回は、文庫で行われている企画展について、担当の先生に会議室での解説をお願いし、その後に展示室での展示見学を行うことを継続してきたこと、それを含めてこれまでの100回の講座の中で13の講座について文庫の先生方にお世話になったこと、“わ”の会10周年記念の区民歴史講座、「寺社を巡る会」10周年記念講演会でも文庫の先生に講師を引き受けて頂いたことを説明。また、『かねざわの歴史事典』ではいろいろとアドバイスを頂いたことに感謝を申し上げた。平成24年度については、6月の永村文庫長の記念講座の再確認、8月の企画展の解説と見学をお願いをした。これに対して、“わ”の会のこれまでの取組を高く評価しているとの言葉を頂いた。

続いて、記念講座の「テーマ」と「概要」の

決定をお願いしたところ、その場で、テーマ名は「称名寺と金沢氏」、概要は「称名寺の創建とその発展過程を僧侶集団と金沢氏の関わりを通じて考える」との回答を頂いた。「我が街かなざわの歴史を学ぶ」という“わ”の会の目的にふさわしく、しかも称名寺は世界遺産候補で最新注目のテーマあることから、これで記念講座は講師・テーマともに「新鮮さや話題性のある内容になった」という感慨を持った。永村文庫長に会場を満席にしますと約束した。

会場満員策

これで記念講座の内容は決定したが、新たに、「来場したが、満員で入場をお断わりする」という事態を招かないようにするという課題が浮かび上がった。

通常の学習会は能見台地区センターの多目的室または金沢地区センターの大会議室で開催している。いずれも部屋の定員が100名で、80%の会員と2・3名のビジターの出席でほぼ満員となる。これに対して県立金沢文庫の会議室の定員は120名である。今回の記念講座の講師とテーマを考えると会員とビジターの参加が通常よりかなり多くなり、定員オーバーとなる恐れが十分に考えられる。これにどう対処するかという問題である。

ビジターはオフリミットとして会員のみに限定すると、これまでの実績から考えて120名の全会員出席はありえない。必ず空席が出る。ならばそれをどのように埋めるか。答えは、「今回は100回記念で、会員向け行事であるから、一般区民のビジターで席を埋めるよりも、“わ”

の会の会員ではないが、分科会会員であり、「わ」の会の準会員ともいえる人たちで埋める」とした。

このように参加者の範囲を定めても、なお定員オーバーの可能性はある。会場を満席にし、しかも当日に定員オーバーで入室お断りが発生しないようにするにはどうするかの問題は完全には解決しない。

それで、通常の学習会では行っていないが、今回はまず会員の出欠を事前に確認し、そこから発生する空席数だけの人数を分科会会員から募集するという手順を踏むことにした。

平成 24 年 5 月 12 日の総会・第 1 回学習会の席で会員に対して記念講座出欠のアンケートを行った。その結果、会員の出席は 79 名となった。この数を踏まえて、各分科会に対して「わ」の会会員外の会員への参加の呼びかけを行った。この呼びかけの間に会員からの追加予

約がかなり出た。

これらの結果、記念講座を間近に控えた 6 月 21 日の時点での出席予約は、会員 93 名、分科会会員 23 名、合計 116 名とほぼ満席となる数値となった。

当日の結果

当日になってみると、予想通りというか、予約なしの会員の来場もあったが、欠席者も出た。結局の出席は、会員 91 名、分科会会員 23 名、合計 114 名でほぼ予定の人数であった。この人数には永村文庫長にも十分に満足頂けたと思う。

講座の内容と出席者の評価は「学習会の概要とアンケート結果」に示す通りであり、100 回記念にふさわしく、記憶に残る講座であった。



講演する永村文庫長と聴講者で満員の 100 回記念講座会場

100 回記念パーティー報告

準備から結果まで

もう一つの重要な記念事業

100 回記念講座の報告でも述べたが、記念事業の最初の案は、午後の開催で、講座・アトラクション・パーティーのセット行事であった。

会員相互の親睦を深めることでは分科会が機能をよく果している。しかし、全会員が分科会に参加しているわけではない。また、いくつもの分科会に参加している会員も多いが、特定の分科会のみでの参加で親睦の範囲が限られている会員もいる。記念パーティーは会員間の親睦促進のために、記念講座について、2 番目に重要な事業として運営委員会では取組んだ。

会場探し 1

メインである記念講座の内容が具体化してくるとともに、パーティーについては最初の想定条件からずれが生じて来た。講座が、午後から午前の開催に、会場が繁華街に近い地区センターからかなり離れた県立金沢文庫になった。

人の流れとしては、記念講座からそのまま記念パーティーに移るのが理想であるが、記念講座の会場である県立金沢文庫の会議室は飲食厳禁である。よって、会場探しが必要になった。

会場としては県立金沢文庫に近いことが望ましい。まずは称名寺の門前通りの店を検討したが、適当な店はなし。次に考えたのは金沢文庫駅前。“わ”の会で時々利用している中華料理店に目星をつける。これで決まりかけた。

来賓

来賓としてパーティーにどなたを迎えるかも課題。記念講座の内容を考えると、永村文庫

長が最適・最優先。そこで 3 月 25 日にその年のお礼と次年度のお願いに参上した席で恐る恐るパーティー出席のお願いを申し出た。すると、すんなりと OK が出た。さらに場合によっては、西岡学芸課長も出席とのこと。

会場探し 2

そうなる、会場の雰囲気や広さが問題。もっと広くて使い勝手の良い会場が必要。午後 1 時半から 50~60 人が集まってパーティーを開催できるそれなりの会場が他にあるか。

これまで、夕方からではあるが同規模のパーティーを横浜市立大学金沢八景キャンパスのシーガルホール内食堂で開催したことがある。大学構内の食堂で、平日の午後 1 時半からのパーティーでアルコールは大丈夫か。聞いてみるとアルコール OK。そこでシーガルホールの食堂に出向き、会場、メニュー、予算の詳細を調査。県立金沢文庫からは結構遠方となり、会員の参加は大丈夫かの心配はあったが、会場はここに決定。

具体的な準備

参加人数と予算を確定するために、記念講座出欠のアンケートとともに記念パーティー出欠のアンケートを 5 月 12 日の総会・第 1 回学習会の席で実施。アンケート結果は心配に反して、申込は 45 名であった。その後分科会会員に対して記念講座とパーティーへの参加募集を行った。

記念講座と同様にパーティー参加の追加予約が会員からあり、6 月 21 日時点での出席予約

は、会員 53 名、分科会会員 8 名、合計 61 名となった。人数が定まったので料理の予算を確定し、シーガルホール食堂に通知。

当日の運営委員の役割分担を検討。式次第とそれにふさわしい挨拶などの依頼先を決めて、それぞれにお願いの連絡を実施し、了解を取得。

会場には 100 回講座記念パーティーと大書した横断幕と式次第の垂れ幕を用意することにし、作成を依頼。平成 24 年度からは、“わ”の会のある会員の奥様にその会員を通じて、学習会の題目と講師の垂れ幕作成を委託しているが、その方をお願いした。

パーティーの進行

会場正面には「祝“わ”の会 100 回講座記念パーティー」の大きな横断幕、演台横の白版には墨書された式次第、中央のテーブルには“わ”の会の旗を立てた多数の舟盛り。会員が待つ中、来賓の永村文庫長が着席。準備は整った（写真 1）。

記念パーティーは定刻通りに今井運営委員の開会の辞でスタート。最初に小俣代表の挨拶。来賓祝辞では永村文庫長から 100 回講座に対するお祝いの言葉を頂戴した（写真 2）。

太田第 2 代代表の挨拶（写真 3）があり、乾

杯の音頭で宴が始まった。これは厳しい日差しの下、昼食抜きで、県立金沢文庫から移動してきた一同には待ちに待った瞬間であった。なお、このときの挨拶をまとめたお祝いの文章を太田第 2 代代表から頂戴したので、8 ページに掲載する。

ビールを片手にサンドイッチなどをつまみながらの歓談が進む中（写真 4）熊谷『かねざわの歴史事典』編集長（写真 5）と宮原「ふれあいの道歩こう会」代表（写真 6）の講座の思い出話があった。

あっという間に時間が経過。飲み物・食べ物も意外なほどに少なくなり、佐藤「懐かしの映画を観る会」代表（写真 7）によるにぎやかな一本締めで中締めとなり、今井運営委員の閉会の辞でパーティーは終了となった。

歓談中は会場のあちこちに人の輪ができ、楽しく充実した時間を共有、会員間の交流を大いに図り、懇親の実をあげることができたと思います。

当日の参加者は、来賓 1 名、会員 50 名、分科会会員 9 名、合計 60 名で、大変な盛況であった。



写真 1 準備が整い、開会直前の 100 回講座記念パーティー会場



写真2 来賓祝辞を永村文庫長から頂く



写真3 太田第2代代表
(乾杯の挨拶)

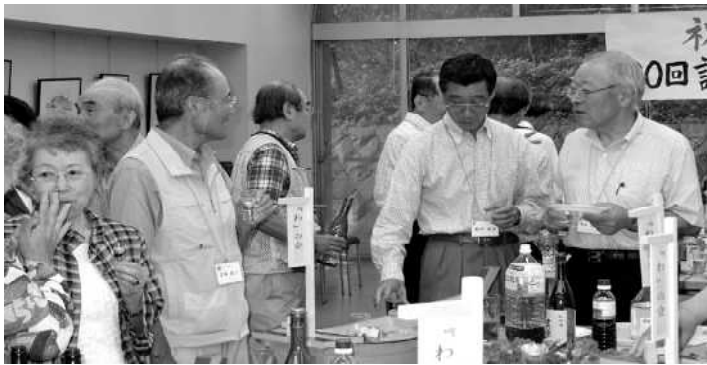


写真4
会場のあちこちで歓談が進む



写真5
熊谷『かねざわの歴史事典』編集長
(講座の思い出を語る)



写真6
宮原「ふれあいの道歩こう会」代表
(講座の思い出を語る)



写真7
佐藤「懐かしの映画を観る会」代表
(中締めの挨拶)

100 回講座記念に乾杯！

太田 耕蔵

平成 24 年 6 月 29 日、横浜市立大学のキャンパスで 100 回講座記念パーティが 60 名の参加を得て開催された。チャーターメンバーの生き残りということで、乾杯の音頭をとることになった。

100 回の節目となる講座は県立金沢文庫の文庫長 永村眞氏による「称名寺と金沢氏」であった。深い知識とユーモアを交えた分かりやすい講話に参加者が本当に満足した 100 回記念にふさわしく素晴らしい講座であった。

“わ”の会が発足して満 13 年、100 回講座を迎えたことに“よくぞ続いたものだ！”と感慨も一入である。これを支えた歴代の役員の皆様、会員のお蔭と感謝する次第である。

第 1 回講座は平成 11 年 5 月の「円海山の連なりからみる“かなざわ”」であった。講師は当時金沢のまちづくりを研究し指導されていた横浜市立大学 村橋克彦教授（同大経済研究所所長、専門：地域社会政策・都市環境政策、第 6 回講座：「かなざわの今～明日への足掛かりを探して」の講師）のゼミ出身で横浜金沢地域総合研究集団のメンバー・篠田徹氏（慶大院・政策メディア研究科生）であった。

円海山に流れる歴史文脈（かなざわの地名の起こり、たたら文化圏、道のつながり）では「かなざわ」の歴史に初めて接し、驚きと好奇心を禁じ得なかった。次いで、地図づくりのロマンでは地図はまちづくりの原点だと理解できた。これが「金沢今昔地図」につながったと思われる。

村橋教授による第 6 回講座で印象的だったのは「出口のある生涯学習へ」との言葉であった。生涯学習はリタイア後の有り余った時間の活用、知識欲の満足、仲間づくりに終わるのではなく、学習成果を地域の人々及び地域社会に還元し社会貢献への出口を探すべきとのこと。この教訓が『かねざわの歴史事典』の発刊、「公開講座」の開催につながっていると思う。

“わ”の会は発足以来、皆さんの努力で守っている二本柱がある。一つは“わ”の会を表現し、アイデンティティーである和気あいあいの（和）、対話・会話の（話）、人と人のつながりの（輪）、感動詞の（わっ！）である。もう一つは“わ”の会は鎌倉文化圏で歴史に恵まれている「かなざわ」の歴史に軸足を置く生涯学習である。

“わ”の会がこれからも会員の拠りどころ、健全なこころの糧となり、150 回、200 回講座と続き、発展していくことを祈念して皆さんと乾杯をしたい。 “わ”の会乾杯！

探訪(第 6 回学習会)のお知らせ

三浦一族ゆかりの地めぐり(横須賀地区)

今年度の探訪は学習会テーマ『三浦一族の興亡』に沿って、「三浦一族ゆかりの地めぐり」を行います。

探訪当日は横須賀市観光ボランティアガイドの会にガイドをお願いしています。個人ではなかなか見切れないところ、故事来歴などを紹介して頂きながら、郷土の武家集団の興亡、栄光と悲劇に思いを寄せたいと思っています。

行程は 咳地蔵 大善寺 衣笠城址
慈眼寺 満昌寺(義明坐像拝観 300 円)
近殿神社、昼食 清雲寺(三代の墓 100 円、観音像拝観 100 円) 腹切松公園
満願寺(重文二体拝観 300 円)です。

なお、

1. 行程は当日の状況で変更が有る事ご了解下さい。
2. 歩行距離：約 7 Km 12,000 歩
3. 拝観場所で拝観料(合計 800 円)が必要です。各自ご負担下さい。
4. 各自、名札ご持参の上、着用をお願いします。

終了後の懇親会も予定していますので、是非ご参加ください。

探訪参加の申込書を 8 月学習会で配布し、受付をいたします。間に合わなかった方は 9 月学習会で提出又は運営委員に連絡下さい。

実施要領

日 時：10 月 12 日(金) 10 時～15 時 小雨決行

集合場所：衣笠住吉公園

行方 京急横須賀中央駅前からバス 20 分で、衣笠城址バス停下車、徒歩 7～8 分

京急横須賀中央駅前バス(京急バス)案内

乗 り 場：4 番または 5 番

路 線：3、4、5、6、8、11 系統

行 先：横須賀市民病院、大楠芦名口、長井、三崎東岡、三崎口駅、YRP センター等

発車時刻：8:54、8:55、9:12、9:16 バス乗車時間：約 20 分 バス代：240 円

なお バス下車後、要所で運営委員がご案内します。

集合時間：午前 9 時 50 分(厳守)

出 発：午前 10 時 10 名/グループで、グループ毎にガイドが付きます。

昼 食：各自用意 昼食場所：近殿神社横の町内会館

解 散：岩戸バス停(京急北久里浜駅行)

費 用：交通費 & 拝観料(800 円)は各自ご負担頂きます。

懇 親 会：15 時 30 分～17 時 会場 検討中 会費 約 3,000 円

注：昼食後に例年通り 2013 年度継続会員の申し込みの手続きを行います。

原稿募集 会報 および ホームページ

会報とホームページは「会員の情報交換の場」。これは、それぞれの発行あるいは開設における方針の柱のひとつです。エッセイ、旅行・探訪記、写真、歴史解説・研究論文 等々、日頃の想い・趣味・研鑽の成果などを寄稿してみませんか。手書き原稿でも OK です。

近くの運営委員・編集委員へ連絡（口頭、手紙、電子メールなど）していただきたく願います。お待ちしております。

なお、原稿執筆にあたっては“わ”の会投稿規定をご参照願います。

学習会

学習会の概要とアンケート結果

第 1 回 「道標等で辿る金沢道」

開催日：平成 24 年 5 月 12 日(土)

会場：能見台地区センター 多目的室

講師：「古文書を読む会」会員 伊達 一雄 氏

出席：93 名（ビジター：なし） 会員出席率：76.8%

概要

講演は「古文書を読む会」の 10 周年記念事業の経過と成果の報告でした。「記念事業としては 3 日間で延べ 34 名の参加のもと保土ヶ谷から称名寺までの金沢道を歩き、冊子『道標等で辿る金沢道』を作成・発行しました。参加した仲間の中で、50 年前にフルマラソンを 2 時間 50 分で走った事で、誰よりも足腰が強い自負を持って下見もこなし、仲間より多く見聞していると言うことで報告することになりました。」との言葉で講演はスタートしました。

東海道 53 次のような宿駅伝馬制度が確立したのは関ヶ原の戦いの翌年の慶長 6 年（1601）で、幕府が各宿場に家康の朱印状を交付したのが始まりです。横浜歴史博物館の企画展“東海道保土ヶ谷宿”展に於いて軽部紘一氏所蔵の朱印状が展示されていました。軽部家はその後参勤交代の本陣がおかれ、代々受け継いできました。

当時の旅人は足腰の弱い高齢者や婦女子は別にして、一日で日本橋から保土ヶ谷宿や戸塚

宿まで 40km 前後歩いていました。旅人は往来手形がないと関所を通ることが出来ず、手形の裏には「旅先で亡くなった時は埋葬されたし」と記してあり命がけでありました。旅支度は雨具と振り分け荷物とお金で、お金は帯の間に隠したり刀の中を空洞にして隠したりしていました。

街道には道標が設置され道行く人に便宜を図ってきました。当然、金沢道にも道標がありました。「古文書を読む会」としては 1996 年に横浜市教育委員会が出した『横浜の古道』の“金澤道”にある全ての道標について現状の確認と由来、道標に刻まれた文字の解説と紹介を目的に歩くことにしました。実際に歩いてみると長い歴史と開発などで消えた道標や関係ない場所に移設されているものも多く、行きつ戻りつ、

横道にそれたり、大変な行動でした。一つの例として笹下の道標は個人の屋敷の中に有り、所有者に聞きましたところ、昔は川向に有りましたが流される心配があるので移設されたとの事でした。10 周年記念事業の冊子には 10 カ所の道標を紹介すると共に、保土ヶ谷に近い石難坂の福聚寺にある「十返舎一九」の弟子「五返舎半九」の墓、上大岡西にある青木神社の説明板の富士山噴火の被害記録、磯子区田中では徳利と杯を彫った墓石など珍しい墓石や説明板等わずかに残る往時を忍ばせる地形や自然も紹介しました。

取り急ぎ 10 周年の記念行事の報告にさせていただきますが皆様も本日公布した冊子を参考に歩いてみませんか、お勧めいたします。

(貝田記)

アンケート結果

全体評価 大変良かった：11、良かった：15、普通：8、つまらなかった：5

- ・我々の最も身近な「金沢道」を選定して頂き非常に興味深かった(7)
- ・長い期間の成果が良く表現されていた(6)
- ・普通見過ごしてしまいがち道標等を良くぞ調べたものである。生涯学習の見本といえる(6)
- ・説明内容と資料の対応ページが良く分からなかった為に、全体の内容が十分理解出来なかった(5)
- ・参考資料が大変に充実していた(4)
- ・実地調査の重要性が分かり実感が伝わった(4)



伊達 一雄 氏



第2回(100回記念講座) 「称名寺と金沢氏」

開催日 : 2012年6月29日(金)
場所 : 県立金沢文庫 会議室
講師 : 県立金沢文庫長 永村 眞 氏
出席 : 114名(分科会会員:23名) 会員出席率:75.2%

概要

最初の金沢文庫は北条金沢実時がここに別荘を持ち、その別荘に土蔵「ふみくら」を造ったことに始まります。この時代、火事がしばしばあり、漢籍書類の焼けるのを防ぐためでした。さまざまな漢籍を集めて「金沢文庫」の判子を押した。それが金沢文庫の由縁である。後々に金沢文庫という典籍類の評価が武家社会では高くなって、徳川家康(紅葉山文庫) 前田綱紀(尊経閣文庫)等の元へ流出、多くが「庫外本」(他に宮内庁、大学、上海図書館が所蔵)となり、現在は実時が収集したものは殆ど残っていない。明治30年(1897)伊藤博文が大宝院跡に石倉を建て、称名寺に残っていたものを収蔵したのが近代の金沢文庫である。しかし、関東大震災で壊れたので、昭和4年(1929)大橋新太郎と県費(5万円ずつ)により金沢文庫を再建した。今の場所には平成2年(1990)に移設されています。現在の金沢文庫には、称名寺の仏教思想の典籍類、それから仏像、仏画などが寄託されています。これらは全て重要文化財になっている。近い将来に国宝になるだろうといわれています。

金沢文庫を守り伝えてきた称名寺は鎌倉時代中期にはじまります。正嘉2年(1258)北条(金沢)実時が六浦別業に阿弥陀院を建立し、2代顕時が釈迦堂を造営し、3代貞顕が弥勒堂を建立する。

実時は西大寺叡尊を鎌倉に招き、称名寺の提供を申し入れたが固辞され、その高弟忍性の推

薦で、下野薬師寺の僧審海が文永4年(1267)称名寺に住持、戒律を厳格に守る「僧所」(律院)とした。実時は称名寺を僧侶が僧侶である本来の形で生きていく場所にしてその姿を見たかったようだ。そのことは僧に戒本の暗誦を義務づける等の寺の規則を定め戒律の順守を掲げていることや僧社会の階層性を否定したフラットな僧集団を目指したこと等が古文書からも伺える。また、金沢氏は平潟湾の瀬戸橋内海を「殺生禁断」の地とすべく六浦荘に命令、違反者があれば政所に報告させる等称名寺を全面的にバックアップしている。かくして称名寺は戒律実践の場と幅広い仏教修学の一大センターとなったのである。

今回の「称名寺と金沢氏」は大変奥が深く難しいテーマでありましたが、分かりやすく、お話しして下さいました。称名寺は「武家の古都・鎌倉」世界遺産登録を構成する資産の1つでもあります。聴講者の皆様には、より深く知っていただく事が出来たと思っています。

(金久保記)

アンケート結果

全体評価 大変良かった：55、良かった：0
普通：0、つまらなかった：0

- ・ユーモアも交え話を分かり易くして頂いた事で理解し易かった(13)
- ・学識が深く素人にも理解し易いテンポでの講話に感動した(10)
- ・金沢文庫の歴史を再認識した(5)
- ・称名寺が大変重要な寺であったことを再認識した(4)

永村 眞 氏



第3回 三浦一族の興亡

開催日：平成 24 年 7 月 14 日（土）

会 場：金沢地区センター 大会議室

講 師：青山学院大学 講師 真鍋 淳哉 氏

出 席：93 名（ビジター：4 名） 会員出席率：73.5%

概要

平成 22 年度から始まったシリーズ講座「古代から現代まで金沢の歴史講座」の第 5 回目である。シリーズは鎌倉時代に入り、本年度は三浦氏に重点を置いて 2 回の講座と 1 回の探訪を行う予定である。その 2 回の講座は青山学院大学講師の真鍋淳哉氏にお願いしており、今回はその第 1 回目であった。真鍋氏は三浦一族に造詣が深い現役の歴史研究者・教育者で、大学での教鞭のみならず一般市民の歴史教育にも積極的に取り組んでおられる。

講座は文献史学の研究者の立場から、逐一具体的な史料を参照する形で進められ、三浦一族の誕生から鎌倉幕府成立までを分かりやすく、かつ興味深く解説して頂いた。

三浦一族の家系は桓武天皇に繋がるとされ

るが、确实とされる史料から裏づけできる始祖は三浦為継。その史料に「為継が後三年合戦に参戦」とある。為継の弟・三浦為俊は白河院のもとで検非違使・下総介を歴任。この頃は、源氏方の都の武士であった。

白河院の院政の中で中央における源氏の勢力は低下し、源義朝は東国における勢力拡大を推進。この過程で三浦氏と鎌倉の関係が始まる。義朝を鎌倉に招いたのは三浦氏。三浦義明の娘は義朝の妻となったり、義明と鎌倉党との紛争調停に義朝が乗り出すなどで、義朝の勢力は関東に拡大し、三浦氏も義朝との繋がりで勢力を确实にした。

平治の乱での義朝没落、頼朝が鎌倉に入るまでの鎌倉では、三浦義明の長子・義宗が杉本に

住み、六浦道を三浦一族の和田義盛が掌握するなど、鎌倉の東部は三浦一族の勢力下にあった。

伊豆で頼朝が挙兵すると三浦氏はいち早く頼朝に味方するが、石橋山の合戦には間に合わず、三浦氏も畠山氏に追われて衣笠城まで退却。ここで義明は討ち死。その場面の「吾妻鏡」と「延慶本平家物語」における記述の相違が面白い。「吾妻鏡」には虚偽はないが、最期を詳しく語らず、義明の言葉や行動の輝きを増す効果を高めていることが如実に理解できた。これらの頼朝による三浦一族の顕彰・優遇、「三浦介伝説」誕生は頼朝・三浦氏双方にメリットがあった。

衣笠から脱出した三浦一族は安房で頼朝と落合い、義澄が総領に就く。この安房で頼朝・三浦氏は勢力を挽回し、東京湾沿いに西進。相模国府での論功行賞で三浦義澄・和田義盛・岡崎義実らが本領を安堵。義澄は「三浦介」に任ぜられ、総領の地位も公認された。また和田義盛は「侍別当」に着任。

源平が争った治承・寿永の乱では三浦・和田・佐原の三浦一族も参戦。また、奥州合戦でも三浦一族が活躍。

アンケート結果

全体評価 大変良かった：29、良かった：11
普通：1、つまらなかった：0

- ・史料にもとづいた迫力ある説明で、説得力があった(13)
- ・初期の頃の三浦氏と源頼朝の関係説明が良かった(4)
- ・話し方に抑揚があり聴き易かった(4)
- ・和田氏と北条氏の位置づけ良く理解できた(3)

真鍋 淳哉 氏

平家追討後、頼朝は御家人の任官、征夷大將軍任官除書受取、幕府の正月行事、三浦義明菩提寺建設などで三浦一族を特別に優遇したが、中でも三浦義澄に対する信認は厚かった。

幕府の中で、三浦義澄以外にも和田義盛・佐原義連が重臣として抜きん出た存在となり、頼朝と直接的な主従関係を結ぶ地位を獲得し、一族支配の体制に変化が出てきた。頼朝の死後は北条氏が急浮上し、三浦氏は北条氏と密接な関係を結ぶようになった。

三浦義澄の死後、和田氏が総領家を凌駕する地位に着くようになり、北条氏や総領家と対立。北条義時の挑発に対して、和田義盛は北条氏打倒を計画し、三浦義村に協力を求める。義村は協力を約束するが、義時側に寝返り、密告。和田義盛が蜂起して和田合戦となるが、義盛は敗死。合戦後、北条義時は侍所別当職となる。また、北条氏は山内荘・六浦荘を獲得し、幕府内で特別な地位を確立。

さて、この続きは、9月の学習会で。

(金間記)



「懐かしの映画」鑑賞録 No.7

「懐かしの映画を観る会」代表 佐藤 晃

平成 24 年度 第 2 回 鑑賞会

喜びも悲しみも幾歳月

<鑑賞日：2012・4・23>

制作：1957年 松竹大船

上映時間：160分

監督：木下恵介

脚本：木下恵介

出演：佐田啓二(有沢四郎)、高峰秀子(有沢きよ子)、有沢正子(有沢雪野)

中村嘉津雄(有沢光太郎)、田村高広(野津)、伊藤弘子(真砂子)

夏川静江(名取夫人)、仲谷昇(名取信吾)、桂木洋子(藤井たつ子)

あらすじ

昭和 7 年、新婚早々の若い灯台員有沢四郎、きよ子の二人は東京湾の観音崎灯台に赴任してきた。日本が国際連盟を脱退した年には北海道石狩灯台に転勤し、雪野、光太郎の二人の子供を授かる。昭和 12 年、中国との戦争が始まった年に、九州、五島列島の女島灯台に転任する。孤島のため子供の教育を考えたきよ子は、島を出て子供と暮らそうと初めて四郎と喧嘩をした。若い灯台員の野津は、台長の娘真砂子を愛しているが、真砂子は灯台暮らしを嫌って結婚を断った。昭和 16 年太平洋戦争が始まった年に有沢一家は佐渡の弾咲灯台に移り、四郎

は次席に昇進した。

昭和 20 年、御前崎灯台に転任となり、東京から疎開してきた名取夫人与知り合った。間もなく、野津夫婦が赴任してきた。若い妻は真砂子だった。米軍機の空襲が頻繁に続く。多くの同僚が犠牲となった。戦争が終わり、また、転勤。

三重県、志摩の安乗崎灯台に移った。二人の子供は親思いの子に育つ。やがて、雪野は名取夫人に招かれて東京に勉強に行き、昭和 28 年、夫婦は風光明媚な瀬戸内海木島灯台に移る……

解説

昭和 31 年頃、深沢七郎の「楢山節考」の映画化を企画した木下恵介は、社長の城戸四郎か

ら、その前に興業的にヒットする映画を作ること条件に許可されたという。木下は雑誌で読

んだ灯台守の妻の手記をヒントにして映画を作ったのが「喜びも悲しみも幾歳月」である。昭和7年から32年までの25年間にわたる灯台職員夫婦の物語は、公開するや、昭和32年の邦画興行成績第2位という大ヒットとなった。北は北海道石狩灯台から南は長崎五島列島の女島灯台に至るまで30か所以上の日本縦断口ケを敢行し、灯台を守る夫婦の喜怒哀楽を、美しい日本の四季とともに描いたこの映画は、日本人の心をゆさぶった。

この映画は(文部省特選)となった。しかし、人間愛と善意が正面に出た美談調の映画では

ない。縦軸に戦争への道を進む激動の昭和の事件を据え、横軸に灯台員の哀歓を描く。病身の妻を大雪のため病院に送れず死なせてしまう灯台員がいる。病身の妻を乗せて馬に曳かれた橇が雪原を走る。橇が止まり、雪原の中で向きを変える。息を引き取った妻と、夫の悲しみを乗せて橇は引き返す。そのロングショットが忘れ難い。一つ一つの灯台での生活の積み重ねで綴る25年間の夫婦の歴史は多くの観客の共感を呼んだ。同名の主題歌は、今なお歌い継がれ、懐メロNO1として、全国民に愛されている。

平成24年度 第3回 鑑賞会

リトル・ダンサー BILLY・ELLIOT

<鑑賞日：2012・5・14>

制作：2000年 イギリス

上映時間：111分

監督：スティーブン・ダルドリー

出演：ジェイミー・ベル、ジュリー・ウォルターズ、ゲアリー・ルイス

あらすじ

1984年、イングランド北東部、ダラム州の炭鉱町に住む11歳の少年ビリー(ジェイミー・ベル)は、去年の暮れにママをなくしたばかり。兄のトニーとパパは炭鉱労働者で、今はストライキ中で生活は苦しい。そんなある日、ビリーがボクシングの練習に通う地元のホールにウイルキンソン(ジュリー・ウォルターズ)のバレエ教室が引っ越してきた。ビリーはボクシングの練習が終わった後、ウイルキンソンの娘のデビーに誘われてレッスンの仲間入りをする。ビリーの動きをみたウイルキンソンは、ビリー

にダンサーとしての天性の素質を見抜き、バレエを勧める。

踊ることに魅力を感じたビリーは、パパに内緒でボクシングの代わりにバレエを習い始めた。熱心に練習するビリーに、先生は他の生徒そっちのけで指導に力が入る。しかし、チュチュ姿に交じって練習しているところをパパに見られて、ビリーは無理やり家に連れ戻される。ビリーは家で一人ステップの練習を続ける。そんなビリーを案じた先生はニューカッスルで行われるロンドンのロイヤル・バレエ学校のオ

オーディションを受けさせようと無料で個人レッスンを始める。試験の朝、ストライキ中の炭鉱労働者たちに多数の警官隊が投入され、兄のトニーが逮捕された。ビリーはパパとトニーを迎えに警察に行くので、オーディションは受けられなかった。

クリスマスがきたが、ストは続いており、パ

パは、薪の代わりにママ愛用のピアノを壊して暖を取るほど生活は苦しい。ビリーは親友のマイケルと深夜、ホールに忍び込み、踊り始める。偶然通りかかったパパが入ってきて、ビリーの踊りを見て、息子の素晴らしい才能に気づいたパパは、受験の交通費を得るためにストライキ破りを決意する・・・

解 説

イギリスの炭鉱町を舞台に、バレーに魅力を感じた少年が、周囲の暖かい応援や、本人のたえまざる努力によってロイヤル・バレー団の頂点に登りつめるサクセスストーリーである。炭鉱町を舞台にしたリー・ホールの脚本が素晴らしく、また、英国劇団の鬼オスティブン・ダルドリーの演出も厳しい生活を強いられながら、どこか明るい炭鉱町の人々をドキュメンタリ

ータッチで描いている。オーディションに行く交通費を稼ぐためにスト破りを決意する父親とそれを止めるビリーの兄の姿は涙を誘う。主役のビリー少年には、2000人を超えるオーディションから、13歳のジェイミー・ベルが選ばれた。少年は喜びや、悲しみや、悔しさを見事バレーで表現し、カンヌ映画祭で絶賛された。

平成 24 年度 第 4 回 鑑賞会

黒い雨

<鑑賞日：2012・6・11>

制作：1989年 今村プロ・林原グループ 上映時間：123分
監督：今村昌平 原作：井伏鱒二 脚本：石堂淑朗
出演：田中好子、北村和夫、市原悦子、沢たまき、三木のり平、小沢昭一
その他：平成元年キネマ旬報ベストテン第1位、日本映画大賞

あらすじ

昭和20年(1945年)8月6日午前8時16分、広島に原爆が投下された時、矢須子(田中好子)は20歳で、出先からの帰り、瀬戸内海を船で渡る途中、放射能を含んだ“黒い雨”を浴びる。戦後、矢須子は伯父の閑間重松(北村和夫)の

実家で、重松の母キン(原ひさ子)と伯母シゲ子(市原悦子)との4人の生活が始まる。矢須子は幼い時、母を亡くして以来、母の兄重松に引き取られている。矢須子は25歳になり、年頃だが、縁談がまとまらないのが重松の悩みの

種である。縁談が持ち込まれても、その度に「ピカに遭った娘」という噂から破談になっていた。重松は疑いを晴らそうと、矢須子の日記を清書し、8月6日には黒い雨に打たれたものの、直接ピカに遭っていないことを証明しようとするが、かえって噂を強めることになった。

重松は原爆病に効くという鯉の養殖を同じ被爆者で幼馴染の庄吉(小沢昭一)と好太郎(三木のり平)とで始め、毎日、釣りで過ごしている。閑間家の隣の雑貨商の岡崎屋の息子の悠一

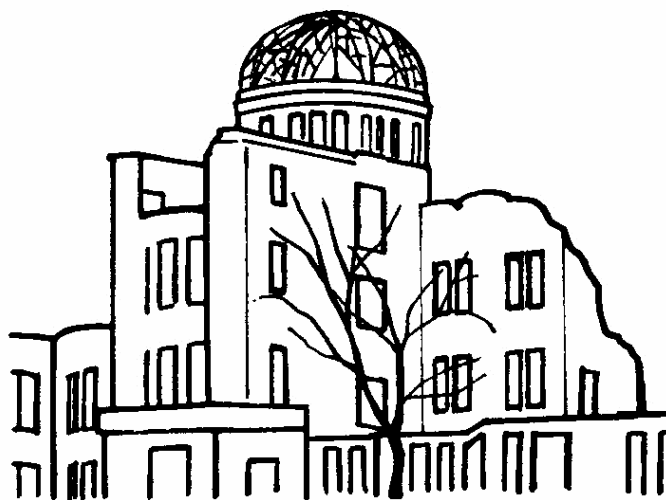
(石田圭祐)は、戦争の後遺症でバスのエンジン音を聞くと精神に異常をきたすが、それ以外は、石像を刻んでいるおとなしい青年である。やがて、原爆病で庄吉、好太郎が相次いで死に、伯母のシゲ子が精神に異常をきたした。矢須子はエンジンの音さえ聞こえなければおとなしく石像を彫り続けている祐一との会話が心の支えとなっていた。しかし、黒い雨は時と共に容赦なく矢須子の体をむしばみ、やがて、髪の毛が抜け始めた・

解 説

井伏鱒二の同名小説を、今村昌平が映画化した。脚本は石堂淑朗で、小説「黒い雨」に井伏鱒二の「遙拝隊長」のエピソードを加えた。今村監督が井伏鱒二の小説が発表された時から温めていた企画という。それまでの今村の作風をがらりと変え、原爆症の疑いがかかり、なかなか縁談がまとまらない若い娘と伯父夫婦の関係を通して、原爆が無垢の市民に与えた影響を淡々と描いている。

被爆した村人は一人、二人と亡くなり葬列が

続く。特に、病が次第に重くなる矢須子が哀れである。今村監督はこの重いテーマを淡々と描くがゆえに悲劇性は一層強まった。矢須子を演じた田中好子の熱演は絶賛され、その年のキネマ旬報主演女優賞をはじめ、各主演女優賞を総なめした。この映画は井伏鱒二の「遙拝隊長」から悠一という戦争で心に傷を負う青年を創造している。矢須子は悠一に癒され、悠一もまた、矢須子に心を寄せている。映画は二人の心が結ばれて終わる。一つの救いである。



「浮雲俳句会」抄録 No.18

「浮雲俳句会」代表 北野 清市

【月別風物詩】

4月 桜

桜：花 は、昔からわが国の国花として、国民に親しまれ、愛好され、「花」といえばサクラを指した。

俳句上は、沢山の季語の代表ともいえ、雪月花の一つ。桜の花の眼目は二つ。一つは、花の盛りの美しさであり、二つは、ぱっと咲きぱっと散る、散り際の潔さである。

次は、4月上旬「花見バス巡り」の際、作句したものだ。

花見バス都心六ヶ所巡り往く 一清（以下同じ）

ミサイルも話題に九段の桜花

D51の機関跨ぐ子櫻茶屋

スカイツリー川に浮かべて花見船

春の灯のなかなるゲートブリッジかな

5月 ゴールデン・ウイーク

ゴールデン・ウイーク は、俳句の世界に登場する全ての花鳥諷詠が最も輝き、活動する年に一度の大型連休だ。

今年は、4 / 29の昭和の日にはじまり、5 / 1のメーデー、5 / 3の憲法記念日、5 / 4のみどりの日それに5 / 5の子供の日にかけての一週間の連休＝黄金週間である。

花は葉にわれらが昭和遠くなり 一清（以下同じ）

炭労も国労もなし労働歌

国旗立つ憲法記念日峡七戸

麒麟の舌伸びてまたのびみどりの日

連弾のショパンのワルツ子供の日

6月 梅雨

梅雨 は、6月（陰暦5月）ごろの降り続く雨の季節。陽暦で6 / 10ごろから7 / 10ごろまでの間の長雨のシーズンである。

5月末頃梅雨に似た雨期があるが、これが走り梅雨。梅雨は、梅の実の黄熟する頃というところからつけられ、梅霖・黄梅雨ともいう。また長雨のため、気持は倦怠し、おとろえる時期だが、青梅雨・梅雨晴の爽快なときでもある。

六浦より朝比奈越えや走り梅雨 一清（以下同じ）

雨もよし明月院の濃紫陽花

レタス買ふ日曜市の梅雨晴れ間

梅雨雀鳴かず遊ばず飛び立たず

梅雨明けや海掻き回す底曳船

卯月の由来は、卯の花が咲く月「卯の花月（うのはなづき）」を略したものだといわれている。

春爛漫...桜をはじめさまざまな花が咲き、鳥が鳴き、行楽に気持ちよい。生き生きした月である。また新学期、新年度がスタート。新入生・新入社員の新しい生活が始まるのが4月である。

ほの白き闇を乗せたる花筏（天賞） 十九
（以下第59回例会の投句）

はかなくも学窓飾の花吹雪（人賞） 一幸
ふさはしき御礼肥撒く花の主（特選） 国眼
花の雲たなびく吉野蔵王堂（特選） 二祥
桜は雪月花の一つ。四季を代表し、日本人の心情にマッチした花だ。掲句は、これらの桜を闇の花筏に、学窓の花吹雪に、吉野の花の雲に、更に花守の御礼肥にと、いろんな角度から謳歌している。

春望や『俳句読本』上梓せり 一清
わが「浮雲俳句会」の6年間の実際の俳句活動を踏まえた『俳句読本』。4月に文芸社から四六判、184頁で上梓することが出来た。今後はこれを軸に、一層俳句の輪を広げてゆきたい。

雲掴み一気に落つる雲雀かな（地賞） とも女
一天の点になりたる揚雲雀 一清
芝目読む9番グリーン揚雲雀（特選） 一馬
雲雀は、鶯とならび称せられる春を代表する鳥。囀りがいかにも春らしく、一直線に中空へ上がる揚雲雀。また逆に地へおりてくる落つる雲雀が圧巻だ。

紋黄蝶追ひつ追はれつ川を越ゆ（特選） 重九
甲高い声とどろかす孕み鳥 一清
まるやかな声裏返す鳥の恋（特選） 勇平
4月の山野に出て見れば、蝶が飛び交い、鳥やいろんな動物の恋の季節。かれらは繁殖の時期を迎えて活発だ。

道越えてふうはりふはりしやぼん玉（特選） 祥代
潮干狩り尻あげる人下げる人 一清
晩春の生活の一齣。しやぼん玉は詩情ある遊び。また潮の干満の大きい大潮になると家族ぐるみの潮干狩りに夢中になれるシーズンだ。

五月は、メーデー、ゴールデン・ウィークにはじまり、花々が咲き、新緑が美しく、行楽も楽しい。一年のうちで最も爽快な月である。

楊貴妃の衣ずれかすか白牡丹（特選） 一馬
（以下第60回例会の投句）

牡丹は、大きな花で豪華、しかも、気品があるので、花の王様とされ、富貴なものとされている。千年以上前中国から輸入。

掲句は、中国唐代の絶世の美女、楊貴妃を連想したのである。

青電車切るは薫風まつぶたつ（特選） 国眼
初夏の里赤白青のつづれ織り（特選） 一祝
これらは大型連休の頃の風物詩。行楽に行った先の青電車の薫風まつぶたつがよい。

また行楽先の里山のいろんな花をつづれ織りにした景に驚嘆したのだ

ほととぎす鳴く音に明るる尾瀬ヶ原（天賞） 十九
ほととぎすきみ逝く知らせ朝の床（特選） 二祥
ほととぎす谷戸から谷戸をほしいまま 一清

兼題1のほととぎすは、万葉以来の鳴鳥。万葉集には156首も登場する。「テッペンカケタカ」と甲高い鳴き声。初音・遠音・一声と青葉の山々に出没する。

東名の右に左に五月富士（人賞） 祥代
歓声や戦艦三笠虹の橋（地賞） とも女

初夏の行楽の一齣。マイカーでドライブする
 高速道の先に、五月富士が見え隠れする。
 また横須賀港では、東京湾にかかる虹に歓
 声を挙げた。朝虹は西、夕虹は東に見える。
 「落ちるなよ」沼が招くぞ青蛙 一清
 花菖蒲レンズ上から左右から(特選) 勇平
 黒船の小柴の沖の穴子かな(特選) 重九
 硝子戸を這ふなめくじののびぢぢみ 一清
 掲句は5月によく登場する動植物である。巨
 木によじ登った青蛙。下には沼が大きい

な口を開けている。また花菖蒲は、紫陽花
 とともに初夏の代表的花として、よく登場する。
 この花菖蒲をいろんな角度からカメラに収
 めているのだ。更に昔から江戸前の鰻(うなぎ)
 関西の穴子といわれてきた。この穴子。小
 柴の沖でよくとれるのだという。更にまたな
 めくじは、ナメクジ科の軟体動物。雨上がり
 の日には、ノソノソ出てきて、なかには硝子
 戸を這ったりもする。

14回金沢区民俳句大会への参加 H24年6月3日

この年次大会も、回を重ねて14回目を迎え、
 定着してきた。因みに、今回の参加者は、40人
 余り、わが「浮雲」のメンバー以外が、四分の
 三を占め、まさに他流試合の大会となった。

〔秀作〕

天賞 ぼうたんに傘さしかくる日差かな
 (他の結社)

地賞 花菖蒲水より咲いて水弾く(他の結社)

人賞 姿見に肢態くねらせ衣替 とも女

ここでは、わが「浮雲」のメンバーの句に絞
 って、選評しておきたい。今回は〔秀作〕3句
 中、人賞を「浮雲」のメンバーが獲得した。

原発事故以来“節電”の大合唱。このため「衣
 更え」も、昨年までの政府の“クールビズ”の
 キャンペーンから、今年はスーパー・クールビ
 ズへと、一段アップした奨励策。しかし、作者
 は、日本舞踊の名取。着物を着ることがよくあ
 るだけに、「衣更え」は、着物の衣更えである。
 それだけに 姿見 に 肢態をくねらせ て衣
 更えするのが普通の仕草。なお、着物の衣更え
 を、衣替 としたことで、洋服の衣更え(衣替)
 とはちがう味が醸し出された。

〔特選〕

走り根の脈打つごとし夏きざす(他の結社)

打ち水を跳び越えてゆく男下駄(他の結社)

野仏を美顔とさせし緑雨行く 一幸
 初夏の海切り絵のような貨物船(他の結社)

ここでも、わが「浮雲」のメンバーの句に絞
 ってコメントしておきたい。

3句目は「緑雨の中の野仏」の写生句。作者
 の素直な思いやりの気持がよく伝わってくる。
 これは仏の慈悲の心にも通じるから不思議だ。
 野仏 を 緑雨 が 美顔とさせ ていった
 のである。

〔ご当地俳句賞〕

朝比奈を切通しけり青嵐(他の結社)

平潟の船音しきり夏きざす(他の結社)

北谷の蛭百匹乱舞かな 祥代

今回はじめて〔ご当地俳句賞〕を新設した。
 その理由は、俳句を志す者にとって、当該地域
 の花鳥諷詠を詠った俳句を作ることが、最大の
 目標であり、かつ、最高の喜びでもあるからだ。
 したがって、今後は、投句する当季雑詠2句中
 少なくとも1句は、金沢区の花鳥諷詠を詠った
 ご当地俳句にしたいものだと思ったからである。

この点、掲句は、釜利谷の南部を流れている
 宮川の源流の 蛭 を詠ったものである。蛭が
 清流に 百匹乱舞 している。是非、われわれ
 も尋ねて行き、蛭の乱舞する姿を鑑賞したいも
 のだ。

六浦あちらこちら(2)

無名の歴史・伝承・逸話など

熊谷 哲

大道(一・二丁目)(昭和55年設置)

和田義盛の痕跡：大道に和田谷戸、瀬ヶ崎に和田山、和田峠などの小字が残っており、この辺りに和田義盛(1147～1213)の居館があったという伝承がある。六浦は勝宝院の荘園であったが義盛が一時期実質的に支配していたともいわれる。

宝樹院：真言宗御室派。創建不詳。三艘にあったが、享保20年(1735)頃現在地に移った。境内の阿弥陀堂には常福寺からの客仏の阿弥陀三尊像(県重文)がある。檀徒に小泉家(純一郎など)がいる。

小泉又次郎誕生地碑：原宿六浦線の大道道路脇に建つ約2.5mの石碑。又次郎(1865～1951)は六浦生まれ、第87代内閣総理大臣小泉純一郎の祖父で明治末から昭和前期にかけて活躍した政治家。衆議院議員、逓信大臣、横須賀市長、貴族院議員を歴任した。菩提寺は碑の後方の宝樹院。

大道の関所：応永29年(1422)鎌倉公方足利持氏の許可の下、大道の常福寺門前に置かれた。14年間続いた。「人は2文、馬は3文」を徴収し称名寺の造営に充てた。

野島層の露頭：大道中学校のプール南側の北向き斜面にある地層の露出部分。水深200～500mの海底に200万～160万年前に堆積した貝類の化石が砂岩層中に豊富に見られる。市の天然記念物。

六浦東(一～三丁目)(平成13年設置)

室ノ木などの海軍施設：昭和16年(1941)室ノ木から瀬ヶ崎にかけての地域に軍用施設が建

設された。地域住民(太寧寺も)を立退かせた。海軍航空技術廠の発着機部(筆者の海軍時代の本拠)と工員養成所。戦後県営住宅・希望ヶ丘高校(後に移転)・横浜創学館高校・関東学院・野島公園(室ノ木地区)などになった。

太寧寺：臨済宗建長寺派。瀬ヶ崎にあったが、昭和18年(1733)に片吹に移った。正治年間(1199～1201)に栄西(1141～1215)が興し、源範頼の菩提寺にしたという。

源範頼伝説：範頼は頼朝に疑われ建久4年(1193)伊豆の修禅寺に幽閉され、梶原景時の急襲で自害した、とされている。が、範頼は逃れて瀬ヶ崎にあった自分の別邸に入り自害し、別邸跡に建てられた薬師寺に葬られたという伝承がある。薬師寺は太寧寺と薬王寺に引き継がれ、位牌や墓がある。地名の鉦切や蒲谷姓はその名残。範頼はさらに生延びて子孫がいたという伝承もある(『かねさは物語』)。

赤ひげ先生：山本周五郎の小説『あかひげ診療譚』に登場。小石川養生所の肝煎の小川笙船(1672～1760)のこと。隠居して金沢に住んだ。遺言により室ノ木の太寧寺(現在は片吹在)に分骨を埋葬。墓がある。

六浦南(一～五丁目)(平成14年設置)

三艘の象：三艘の港に象を乗せた唐船が着いたという伝えがある。着岸時には象は既に死んでいた。村人は埋葬して象塚を作ったという。小字名「象ヶ谷」と「象ヶ谷橋」(侍従川支流に架かる)が名残り。

三艘の文殊堂：三艘町内会館の一画が文殊堂。堂は古くは京急逗子線の線路敷にあった。古記

録によれば堂の本尊は浦郷(追浜)の良心寺の本尊(小田原北条氏の家臣朝倉景隆の守護仏)が移されたもの。毎月、文殊講という念仏講が行われている(寺宝の繰り数珠を使用)。会報第29号参照。

三艘の厄神様：六浦南一丁目の崖のやぐらに祀られており、悪疫から三艘を守った厄神様として尊崇されている。永禄4年(1561)里見義弘が小田原北条氏を攻めた時、反撃してきた北条氏康に敗れた。里見方の一武將が三艘で力尽きて倒れ、そこから靈魂の火柱が立ちのぼり、「自分を祀れば三艘村に悪い病気を入れさせない」とのお告げがあった。その後六浦一帯に悪病が流行し死者が出たときも三艘だけは悪疫から免れたので、村人はやぐらを掘り祠を作って崇めた。

場所不明

金沢の福太郎：『甲子夜話』正編(1825)に絵入りで記述されている金沢の河童の説話。「享和1年(1801)金沢村の漁夫重右衛門の姉の夢枕に童子が現れ、我為に一社を建てれば水難疱瘡麻疹の守神になると告げた。家伝の水難疱瘡のまもりと書いた箱を開けたら、面は猿にようで、四肢に水かきがあり、頭には凹みがある異形のものがあった。これを福太郎と称した。河童は恩返しに福を授けるので福太郎という説の由来は金沢の河童にある」とある。漁夫や社は不明。

金沢八景遊覧：源頼朝や第4代將軍藤原頼経(1218~56)などの来遊伝承がある。江戸時代に広重の浮世絵や種々の紀行案内書により、江戸からの遊覧が盛んになった。保土ヶ谷から金沢道に入り金沢八景で遊び、鎌倉・江ノ島を経て江戸に戻るコースが定番だった。船遊び・料亭

宿泊・九覧亭眺望が中心。料亭は東屋・扇屋・千代本(現在も営業中)などがあつた。九覧亭は金龍院内にある眺望台。

ゆうらん揃金沢八景：土佐節の一曲で、『色竹蘭曲集』にある。近藤清春はこの曲をもとに「源頼朝の船中酒宴を中心とし、背景に八景図をあしらった」絵を描いた。土佐節は江戸浄瑠璃の一派。

徳川家康と光圀：家康は2回来訪。光圀は『新編鎌倉志』編集の下見の為、延宝2年(1674)に金沢と鎌倉を巡覧し、その記録を『鎌倉日記』とした。

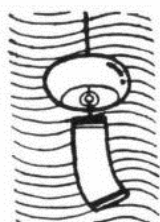
武州金沢敵討：寛政4年(1792)府中の神官川崎左京の子供の兄妹(数馬とくめ)が、4年の辛苦の末、金沢土橋で仇討に成功。金沢藩家中の武士2名が検分。土橋の位置不明。金沢文庫所蔵の瓦版あり。

吉田(卜部)兼好来遊：『徒然草』作者の兼好は鎌倉から室町時代にかけての歌人の卜部氏。金沢文庫や称名寺に来遊したといわれる。江戸時代に多くの兼好伝説が創作されており、六浦在住説や吉田兼好という呼び名もその一連の流れである。

琉球船漂着：応永10年(1403)琉球国の船が六浦に漂着し、船中より楽の音が聞こえた。『南方紀伝』(江戸時代中期以後成立の史書、著者不明)に記載されている。

謡曲「金沢狸々」：六浦津が舞台で、酒の楽しみと景勝をテーマにした謡曲。酒慶と狸々とのやり取り。

謡曲「六浦」：「旅の僧」と「青葉の楓の精」との称名寺での会話をテーマにした謡曲。冷泉為相が「青葉の楓」を詠んだ和歌と堯恵の『北国紀行』を基に室町時代後期に作られた。



『吾妻鏡』を読む(5)

小倉 英明

北条義時の子・実泰（まねやす）を祖とする一流を金沢北条氏といいます。実泰の子・実時が武蔵國六浦莊金沢郷（金沢区金沢町）に館と菩提寺（称名寺）を構えたことに由来する通称です。

定説はないが金沢北条氏が『吾妻鏡』編纂の有力メンバーだったことは間違いないところです。『吾妻鏡』の金沢北条氏に関する記事を拾い読みします。

建保二年（一一二四）十月三日

「卯の剋、相州参着したまふ。戌の剋、相州の子息御前において元服したまふ。理髪は前駿河守惟義朝臣なり。相模五郎実義と号す」

（注）相模守北条義時の子息が七才で元服（後に実泰（まねやす）と改名する）。この頃、日本列島は地震活動期で九月廿二日、十月六日に大地震と『吾妻鏡』に記されている。前年の五月に和田合戦があり、翌年の正月には実義の祖父時政が死去。

承久三年（一一二二）五月廿二日

「小雨常に瀧（たぎ）ぐ。卯の剋、武州京都に進発す。従軍十八騎なり。子息武蔵太郎時氏、弟陸奥六郎有時、北条五郎実義、尾藤左近将監（略）京兆この輩を招き皆兵具を与ふ」

（注）「承久の乱」勃発の記事で、武州（北条泰時）が僅か十八騎を率いて京都に向けて先発するシーン。泰時に従う時氏（十九才）有時（二十二）実義（十四）ら十八人に京兆（義時）は武具を与えた。

そして三日の後、鎌倉軍十九萬騎が東海、東山、北陸の三道に

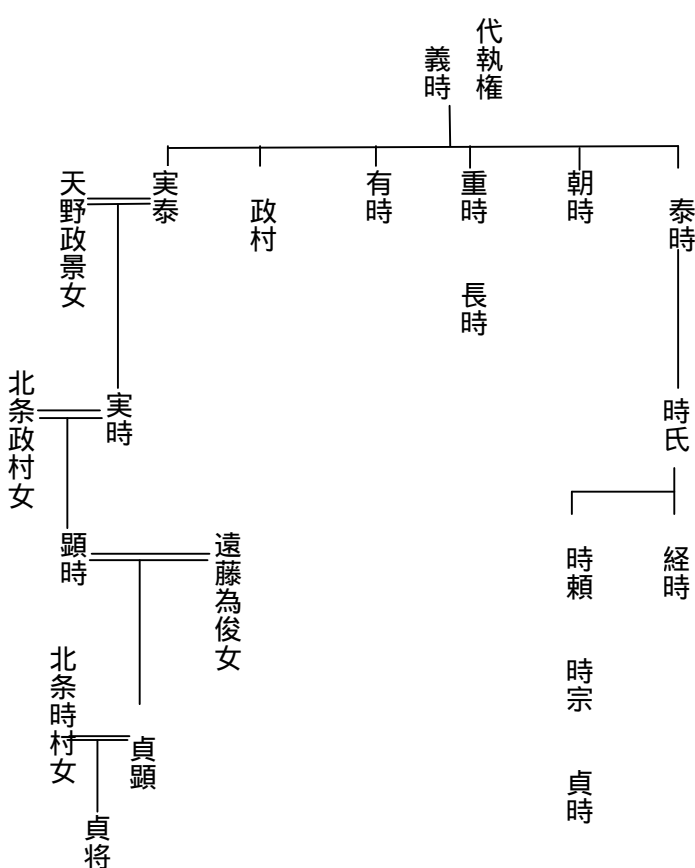
分かれて上洛した。

安貞二年（一一二八）正月三日

「蒔飯、越州（朝時）の沙汰。御劔は駿河守重時、御弓箭は陸奥四郎政村、御行騰・沓は陸奥五郎実泰、御馬五疋」

（注）奇しくも、北条義時の子息朝時（三十六才）重時（三十一）政村（二十四）実泰（二十一）が居並ぶ風景。

蒔飯とは、有力御家人が正月に將軍を饗応する儀式で御劔役御調度（または御弓箭）御行騰・沓（おんむかばき）の三役がある。行騰とは乗馬の時に着用する毛皮の前掛けのようなもの。御馬五疋は献上する馬のこと。



「家康忌」参詣の記

渡邊 紀一

抜けるような青空という言葉があるが、その日の空模様がそうだった。四月十七日は「家康忌」として禅林寺では毎年法要が営まれているという。今日がその日である。禅林寺は我家から坂を一つ超えた五分とかからない距離に位置する。

一瞬の華やぎの季節も逝き、やがて薄緑輝く葉桜に変わって行こうとしていた。葉桜の頃というのも花の頃とは違う美しさがある。生きていこうとする万物のいきおいが感じられる。

禅林寺境内の芝生は輝いて見える。人影はなくいつもと変わらない静寂な佇みである。この境内はいつもこうなのだ。

日時を間違えたのだろうか。思い切って玄関に回り呼鈴を押す。まもなくして奥さんが現れる。事情を説明して参拝に来たというのを訝しげに「何も聞いてない...」「...?!」

住職は留守だった。

何か心当たりがあるように「ちょっと待ってください。」と言って奥の部屋に消える。やがて「ありました。飾ってありました」と言いつつ、コロコロと笑う。屈託ない明るい声にこちらが救われる。さっき迄のあの緊張は何だったのだ。

案内された部屋の床の間にそれは掛けられていた。束帯姿のあの画像ではあったが色彩が鮮やかなことが意外だった。古さを全く感じなかった。

坂本の領民よろしく「二礼二拍一礼」の参拝を済ませ、御神霊撮影の許可を得る。帰り間際、資料(由緒)を頂く。この間5分と掛らない。

毎年の事とはいえ、この日は「坂本」の領民達にとって文字通りハレの日だったに違いない。農作業を気兼ねなく休み今日一日をどう楽しく過ごそうかと前の晩から思い描いていたと思う。ある家は日頃の疲れを癒すことを楽しみにしていたかもしれない。

禅林寺で頂いた資料「徳川家と禅林寺」には、紅葉山から当時の寺への「申達書」および村民への「申渡し覚」、現住職のメッセージがある。それらは次(太字部分)のようである。

申達書

一 今般其寺へ

御神影並びお道具等御別當より預け申され候事、畢竟ご神領の者共恐れながらご厚恩蒙り奉り候事故冥加と為し、毎歳四月十七日、別紙村役人え差し越され候書付の通り、其正殿へ安置奉、御神酒御供等献備、何れも参拝致す様申し渡され候条右祭礼料米村役人より年々之を受け取られ粗末の儀無き様御取り計らい之有るべく候事。

一 御神影御当日参拝相済み候えば、村役人立ち会い御道具等相改め御案へ相納め、其元並び名主組頭各々封印致し、平日は仮令其の住持為りと雖も猥りに拝見致す間敷く候。尤も御案を平常は清浄の場所え安置奉るべき事。

一 御神影安置の儀は前条申し達し候訳に候えば、右に付き平常寺門に於いて權威がましき儀之無き様致さるべく候事。

右の条々其意を得られ永々違乱無き様致さ

るべく候。已上

紅葉山後別当所 鈴木 平馬 印
安永九庚子歳四月 林 佐 仲 印

(筆者注記)

この度禅林寺へ御神影及び御道具(金銀御幣、供物皿、三宝、御神酒徳利、花瓶など)を御別當から預けられた。神領の者たちは恐縮し毎年四月十七日は村役人が書付の通り、寺の正殿安置し御神酒供物など供え参拝すること。祭礼料を村役人から受け取って失礼のないようにすること。

当日参拝が済んだら村役人立ち会いの上、異常無きことを確認して決められた場所に納め、名主、組頭が封印し、平常は住職と言えども拝見してはならない。平常は清浄な場所に安置すること。

御神影安置の節は前文に申し渡してあるとおり平常は門前にて権威がましいをしてはならない。以上のことをよく理解し、いつまでも秩序を乱すようなことがあってはならない。

安永九庚子歳四月 1780年4月

申渡し覚

一 此度其村禅林寺え

御神影並び御道具等御預け成られ候に付き、別紙御書付の表何れも敬服仕り、永々違乱仕るまじく候。尤も御祭礼料米壹石五升は毎歳年貢米にて取立て、右お預けの寺院え相渡し申すべき事。

一 毎年四月十七日、何れも農業相休み、平常恐れ乍らご真深意蒙り奉り候事に候えば、夫々の身分に応じ相祝い候てご神前え参拝致すべく候。尤もお預けの寺にて粗末之取扱を見聞者、右の趣を御別當所え申し上げべく候。且又他領の者参拝の儀は禁制たるべき事。

一 非常の有る節は村役人に限らず、小前之面々に至るまで早速やかに駆け付け、右ご案大切に護持し奉り外之寺院え遷座奉り候事。

一 御祭礼相済みお道具等相仕廻候節も、ご神影ご安置に付き平常心得の儀は別紙禅林寺え申達し候通り相心得申すべき事。

一 御神領の内殺生の儀、当村の者は申すに及ばず他所の者成り共猥りの儀候えば、その趣申達致すべき候事禁制に候。之亦権威がましく之無き様致すべく候事。

右の条々其意を以て村中大小の百姓えも申し聞かせ、永々違乱之有るまじき者也。

紅葉山後別当所 鈴木 平馬 印
安永九庚子歳四月 林 左仲 印
法行寺 印

(筆者注記)

この度禅林寺に「ご神影」と祭礼用道具を預けるので何時までも間違いのないように丁重に扱うこと。祭礼料として米一石五升年貢から取り立て禅林寺に渡すこと。

毎年四月十七日は皆、農作業を休み、日頃の御謝恩受けていることに恐縮し夫々の身分に応じ神前に参拝すること。ご神影など預かっている寺で粗末に扱っていることを見聞きした時には別當所連絡すること。

非常の場合は村役人に限らず近くのものご御神影等を持ち出し、他の寺院へ移すこと。

祭礼が終わり道具など仕舞う際は並びに御神影の安置に関しては、禅林寺にも伝えてある通りに心得て処置すること。

御神領内の殺生は坂本村の者は言うまでもなく他所の者成りとも妄りのことがあってはならない。また権威がましいことの無いようにすること。

以上のことはよく理解し、村中の百姓にもよく言い聞かせいつまでも秩序を乱すようなことがあってはならない。

紅葉山別當所から当山並びに村中の者宛にこのように細々とした通達がなされています

た。これらの諸司令も明治維新による徳川幕府の崩壊と共に失効し、当山及び坂本村は平常の寺院と村の状態に戻ったのです。しかし、例えば体制がどのように変化しようとも当山は従来の仕来りを変革せず往時の供養をその俣に継続しております。このことは取りも直さず『人類いかでか恩を知らざらん』と修証義に示される「行持報恩」の心でありましょう。

以上、禅林寺資料「徳川家と禅林寺」より

現在、「坂本」は存在しない。その辺りは嘗ての宿村、赤井村とともに「釜利谷東」と一括りされている。辛うじてバス停が「坂本」と名残を留めている。金沢文庫駅を出発した小型バスは手子神社を過ぎるとすぐに車体を振るようにして狭い橋を渡り、バス停「坂本」を経由して六浦方面に向かう。バス停「坂本」方向に曲がらずに真っすぐ行けば禅林寺方面だ。しかし車が通るほどの幅がない。

この道は生活の道として釜利谷開発以前（昭和 25 年）の地図にも明確に記載されている。地図はこの道が鎌倉に導くことを教えている。釜利谷に端を発する所謂、鎌倉古道は幾つもあったと推察できる。しかし、横・横道路建設を含む一大開発は道という道を切り刻み地中深く埋めてしまった。水源を関が谷市民の森付近に求める釜利谷町小川アメニティはこの道に沿うように流れ、下って手子神社付近で宮川となる。

手子神社の東側を小泉という。この付近に立つと無理なく広重の「小泉の夜雨」を思い描ける。前記、昭和 25 年作成の地図には拡大鏡を通して「市営小泉住宅」と読める。

御神影の存在はこの小さなしかし平和な坂

本村と周辺の他領村民に光と影の大きな変化をもたらしたと思う。その驚きと喜びと戸惑いは葵の紋所を凌ぐものだったと思うがそれを伝えた資料は見たことがない。「古文書を読む会」の皆さん、真田先生よろしく。

当日撮影した御神影を下に示します。紙面の都合でモノクロの縮小版 1 枚ですが、原本およびその他のカラー大判写真は“わ”の会ホームページに寄稿済みです。下記の URL からご覧ください。

https://picasaweb.google.com/wanokai.kanazawa/2012417?authkey=Gv1sRgCM_7-6PTyLWxhAE#



禅林寺の御神影

行事予定

2012年9月～11月の予定

注：表中の「CC」は、「地区センター」の略

	9月	10月	11月
学習会	9月8日(土) 金沢CC 9:30～12:00 三浦一族の興亡 「権門」三浦義村と宝治合戦 青山学院大学 講師 真鍋 淳哉 氏	10月12日(金) 集合 9:50 衣笠住吉公園 探訪 「三浦一族ゆかりの地巡り」	11月10日(土) 能見台CC 9:30～12:00 金沢合戦と上杉氏 『新版かねざわの歴史事典』 編集委員長 熊谷 哲 氏
寺社を巡る会	9月6日(木) 集合: 10:00 京急弘明寺駅 テーマ: 弘明寺・岡村地区 訪問先: 弘明寺、三殿台遺跡、岡村天満宮、岡村公園	10月4日(木) 集合: 10:00 京急上大岡駅 テーマ: 港南区東部地区 訪問先: 福聚院、正覚寺、東樹院、うなぎの井戸	11月1日(木) 集合: 10:00 JR大船駅 テーマ: 舞岡地区 訪問先: 正安寺、永勝寺、舞岡公園、舞岡八幡宮
古文書を読む会	13日(木)10:00～ 金沢CC 「慶珊寺文書」 27日(木)10:00～金沢公会堂 「坂下門外の変」	11日(木)10:00～ 金沢CC 「慶珊寺文書」 25日(木)10:00～金沢公会堂 「蛤御門の変」	8日(木)10:00～金沢公会堂 「慶珊寺文書」 22日(木)10:00～金沢公会堂 「蛤御門の変」
ふれあいの道歩こう会	9月13日(木) 総会 14:00～金沢区民活動センター 9月20日(木) 茨城県15番コース 学園都市のみち 予備日 21日(水)	10月19日(金) 茨城県14番コース 寺社めぐりと田園風景のみち 予備日 11月30日(金)	11月15日(木) 茨城県16番コース 予科練ゆかりのみち 予備日 16日(金)
懐かしの映画を観る会	9月10日(月)12:30～金沢CC 黄色いリボン(米) 9月24日(月)12:30～金沢CC 灰とダイヤモンド (ポーランド)	10月8日(月)12:10～金沢CC 知りすぎた男(米) 10月22日(月)12:30～金沢CC かもめ食堂(独立)	11月12日(月) 12:30～ 金沢CC コーラスライン(米) 11月26日(月) 12:30～ 金沢CC 蜘蛛の巣城(東宝)
浮雲俳句会	9月30日(日) 9:30～ 金沢CC テーマ: 白馬岳	10月28日(日) 12:00～ 野島青少年研修センター 金沢区民俳句大会	11月25日(日) 9:30～ 金沢CC テーマ: 円海山
パソコンを使いこなす会	9月4日(火) 金沢CC WORD 復習講座 - ワードアート - WORD 基礎講座 - 文書印刷 - 9月25日(火) 金沢CC EXCEL 復習講座 - 書式の応用 - 9:30～12:00	10月2日(火) 金沢CC EXCEL 復習講座 - 数学関数 - Windows 基礎講座 - 圧縮と解凍 - 10月16日(火) 金沢CC WORD 復習講座 - 罫線 - 9:30～12:00	11月6日(火) 金沢CC WORD 復習講座 - 図形の作成 - 11月20日(火) 金沢CC WORD 復習講座 - 図形の作成 - 9:30～12:00

連絡先: 学習会 782-8147(小俣) 寺社を巡る会 784-1460(松本) 古文書を読む会 784-4900(真田)
ふれあいの道歩こう会 783-4539(宮原) 懐かしの映画を観る会 701-1606(佐藤)
浮雲俳句会 774-3878(北野) パソコンを使いこなす会 701-9775(林)

編集後記 最近人の名前がすぐに思い出せないことが多くなった。それは加齢のせいだと言われると返す言葉がないが、読む方も段々根気が続かなくなっている。まして書く方となると一向に脳が機能せず文章が出てこないで困っている。そんな訳で毎号会報に寄稿して頂いている会員の皆さんには「感謝」以外に言葉がない。何とかその心意気にあやかりたいと思うが、暑い夏は動きが鈍くなる。前に継続は力なりと気取ったけれど、続けることはそれ相応のエネルギーが必要なようだ。(D)	発行日	平成24(2012)年8月4日
	発行月	4回(2,5,8,11月)
	発行者	金沢区生涯学習“わ”の会
	編集長	大門 利晴
	編集委員	貝田 誠作 田中 徳明 伊達 一雄 吉田 寿紀 相川 勲 金間 誠一 金久保常二